

# 南海研だより

1981年 10月 No. 5

南総研だよりNos.1～3は南海研だよりNos.1～3とよみかえる

## 照葉樹林文化と鹿兒島

中尾 佐助 (南海研センター長)

私は、この夏休みの間に南太平洋のパプアニューギニアとソロモン群島へ調査に行きました。パプアニューギニアで一番人口の多い地域は中央高地で、高度1000～2500メートルの地帯です。この地帯には草原状をなした所が多くあります。住民はサツマイモ、サトイモ、ヤマノイモ、バナナなどを栽培する新石器時代です。そこの草原はその栽培法が焼畑であったので、本来のシイ類の照葉樹林が破壊されたのです。照葉樹林帯はパプアニューギニアでも一番人口密度の高い住みよい場所だったのです。ところでこのパプアニューギニアの新石器時代の農業とここ日本の鹿兒島の農業を比較すると、バナナ以外のイモ類は共通しています。ただ著しい違いは日本にはイネなどの穀類のあることです。

ところでヒマラヤへ行きますと、ヒマラヤで一番人口の多いネパールなどでは、人口が一番多いのは高度1000～1500メートルの中腹地帯です。この地帯はもともとは常緑カシ類を主力とした照葉樹林帯でしたが、今は山腹に水田(1800メートルまで)と畑が見渡すかぎりきざみこまれています。ヒマラヤでも暖温帯である照葉樹林帯が一番住みよくて、人口が多くなっています。

中国の揚子江以南、日本の中南部も照葉樹林帯に入りますが、そこは文化が一番ひらけた地帯で、今は原生の照葉樹林は殆んど残っていま

せん。

ヒマラヤから中国、日本にいたる照葉樹林帯では独自の農耕文化が生まれました。始めはイモ類によるもので、その形がパプアニューギニアに今も見られるのです。それに続いてアワのような夏作雑穀とイネの栽培がこの照葉樹林の文化の中で始まったのです。この文化が中国、日本へと渡来し、南方では東南アジアにひろがり、イネはインドへも伝播して、現在の東アジアの農耕文化の基礎となりました。

(55年9月20日記念講演会)

## フィリピン中部海域における オウムガイ棲息環境に関する 予備調査\*

早坂 祥三 (理学部・地学)

生きて化石、の一つとして有名なオウムガイは、分類学上は、軟体動物の中の頭足類(綱)に属する海棲動物で、平面上で螺旋状に巻いている美しい貝殻をもっている。貝殻をもっているのが、我々に身近な貝類(二枚介や巻貝など)に最も近縁な動物と考えたくなるが、解剖学的な特徴から、タコ、イカの仲間であることがわかっている。表に示すように、頭足類は、オウムガイ類、アンモナイト類、鞘形類(タコ、イカの仲間)という三つの亜綱に分けられ

\* 文部省科学研究費補助金—海外学術調査。課  
番号504207。

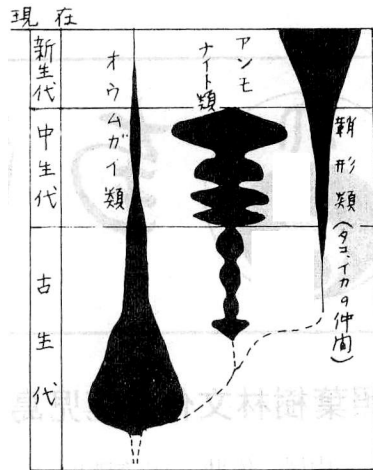
ているが、アンモナイト類はオウムガイ類とよく似た体制をもっていて、両方合わせて四鰓頭足類とよび、二鰓頭足類とよばれるタコ、イカの仲間と区別することがある。これらのうちアンモナイト類は中生代の終り（約七千万年前）に絶滅し、オウムガイ類は現在までわずかに生き残っており、タコ、イカの仲間は現在最盛期に達している。タコ、イカの仲間は別として、オウムガイ類、アンモナイト類は、はるか昔に栄えた動物群であることが明らかで(第1図)過去と現在における種、属、科の数はおよそ次の通りである。

	化石種	現生種
オウムガイ類	75科, 300属, 3500種	1科, 1属, 6種
アンモナイト類	200科, 1500属, 10000種以上	ナシ

オウムガイ類とアンモナイト類が基本的には同様の体制をもっているのので、現在細々と生き残っている1属6種のオウムガイ類について詳しく知ることができれば、現在絶滅あるいは衰退してしまったこれらの化石生物群を理解するために大変役立つはずである。

しかし残念ながら、これまでは、美しい貝殻が鑑賞用又はボタンの材料として商品化されているだけで、水産資源としての利用価値が少ないために、オウムガイ類に関する研究は世界的に見ても微々たるものであった。その様な状態の中で、数年前から我が国の頭足類化石の研究者が中心となって発足した研究グループが、オウムガイ類の室内飼育実験を開始し、数多くの研究成果を挙げてきたが、自然界（野外）におけるオウムガイ類の生態については不明な点が数多く残されていた。

このような、オウムガイ類に関する知識の空白を埋めるために、その分布地域の中で地理的に最も近いフィリピン国内海域を対象として現地調査を計画したところ、本年度は予備調査の費用が交付されたので、8月25日より9月16日までの23日間、現地調査を実施した。参加者は、



第1図 頭足類各亜綱の時代的消長

Phylum Mollusca (軟体動物門)

- Class Amphineura (双神経綱 - ヒザラガイ類)
- Class Pelecypoda (斧足綱 - 二枚介類)
- Class Scaphopoda (壺足綱 - ツノガイ類)
- Class Gastropoda (腹足綱 - 巻貝類)
- Class Cephalopoda (頭足綱 - オウムガイ, アンモナイト, タコ, イカ等)

Class Cephalopoda (頭足綱)

- Subclass Nautiloidea (オウムガイ類) } Tetrabranchia (四鰓類)
- Subclass Ammonoidea (アンモナイト類) }
- Subclass Coleoidea (鞘形類) - Dibranchia (=二鰓類)

筆者および税所俊郎（鹿大水産学部）、蟹江康光（横須賀市博物館）の三名である。行き帰りの、短期間のマニラ滞在に加えて、ネグロス島、セブ島、ボホール島、パナイ島の各地をまわって、オウムガイ棲息地や生態条件等に関する予備調査を行った結果、いくつかの新知識を得ることが出来、また6個体の生きたオウムガイ標本を日本へ持ち帰ることができた。さらに、今回の旅行を通し、フィリピン国内の諸機関（国立博物館、フィリピン大学、シリマン大学、SEAFDEC等）における研究者達と、十分な情報交換を行うことができた。1981年度には、約10名の調査団を編成し、現地における本調査を行う予定であるが、その際にはフィリピン側（主として国立博物館）の研究者との共同研究として実施することについて、既に合意が得られている。（55年12月1日研究会）

## 東ポリネシアの考古学調査 — マラエをめぐる —

新田 栄治 (教養部・人文)

1980年7月1日より10月11日までフランス領ポリネシア、ツアモツ群島の環礁、タカポト、タカロア、レアオの3島で発掘調査、一般調査を行った。タカポト、タカロアではマラエの踏査、試掘を、主調査地であるレアオでは全島のマラエの踏査、略測、一部のマラエの発掘及び6か所の包含層を発掘した。タカロア、レアオともに K.P. エモリーの調査以来、数十年にわたり本格的調査は行われていない。今回、東西ツアモツ群島のマラエを比較研究するうえで、またレアオ島の独自性を明らかにするうえで貴重な調査成果を挙げた。

タカロアでは6か所のマラエを踏査し、ランギハオアのマラエの実測と前庭部の試掘、周囲の箱式石棺墓と思われる遺構を発掘した。前庭部からは地表面に人間の頭骨破片、歯、真珠貝製釣針等が散乱し、また試掘壕からも百数十本にのぼる多数の歯(乳歯も含む)が出土した。マラエでの人身供儀はクック探險隊の絵に具体的なあり方を見ることができ、考古学的にそれを確認できた。箱式石棺からは歯数本が検出されたのみで、墓の確証は得られなかったが、レアオにおいてもマラエの背後に箱式石棺墓群が存在する場合があります、タカロアの場合も墓とみなしてよいと考えられる。

レアオではアカウタパパトゥアのマラエ・コンプレックスを全掘した。同一地に4基のマラエが重複しており、マラエの型式編年に重要な意義のある遺跡である。この発掘結果によれば、痕跡だけ遺存する小形長方形プランのアフ(石壇のこと)が複数、横一列に並んだ型式のものから、アフが1つだけ大形化し、前面に低い段をもち、片側にのみ付属する低いアフをもつものへ、そして、主アフの両側に低い付属アフ(ボックス)と前庭部中央に小形の低いアフをもつ型式へ、さらに、主アフの左右、前面に各種

の付属施設をもつものへという、型式の変化、すなわち、付属施設の複雑化という変遷が想定できる。レアオにおいては40か所くらいのマラエがあり、ポリネシアでもきわめて多数のマラエのある島であるが、マラエの型式にいくつかの種類があることが明らかとなったことから、マラエの建立時期が何期かに分けられることになり、一時期におけるマラエの数は少ないものであろう。分布をみてもマラエが密な地域と、別のマラエとの間隔が極めて大の疎な地域とがあり、各氏族の宗教施設であるマラエの性格から、氏族の土地占有と氏族の居住の交代など多くの問題を提起している。西ツアモツ型のマラエの存否については1976年の調査の際に存在がいわれたが、破壊され基礎部分のみの残ったレアオ型マラエの痕跡であることが判り、該マラエを西ツアモツ型とすることは否定された。今回新発見のカイファガの庭部を四角に壁で囲ったマラエが、西ツアモツに分布する一部のマラエと類似しており、あるいは西ツアモツからの影響が考えられるかもしれないが、現在のところ、時間的位置づけが判明しないため、確言できない。

レアオにおいても、アカウタパパトゥアとテアパイ両遺跡において祭祀の一部が明らかとなった。前者ではウミガメの頭骨と脊椎骨を前庭部に一列に並べ、他の部分の骨を左側ボックス内に納めるというウミガメを供献し、部位による扱いの差をみせるという祭祀行為があった。後者ではアフ左側より、焼かれた人骨2体分が散乱して発見され、人身供儀の祭祀行為が想定された。

ポリネシアでの民族移動を考えるうえで、レアオは重要な位置を占める。また、エスノ・アーケオロジーの分野でも興味深い島である。残念なのは入域が困難なことである。

なお、レアオで得られた放射性炭素年代測定用サンプルは現在、東京大学において測定中であり、その結果が待たれる。(56年2月23日研究会)

## 南方の大学を訪ねて

蟹江 松雄 (前鹿大学長)

南太平洋に浮かぶ国々(島々)にあって、相互に強い協力関係にある総合大学には、ハワイ大学、南太平洋大学(USP)、パプアニューギニア大学(UPNG)、グアム大学がある。この中ハワイ大学とグアム大学は今回の旅程から外し、ハワイの東西センターとビショップ博物館を加えた。ここでは紙面の都合で、USPとUPNGのことだけに触れる。

USPはフィジーのスパにあるが、フィジー1国の大学ではない。南太平洋に最近新しく興った11の国(又は島)の協力によって1962年につくられ、それらの国の人材養成に当たっている。学生数はほぼ2000人。碧い海岸にまで続く広いキャンパスは軍用地の跡地で、兵舎が研究棟、講義棟に使われていたが、最近オーストラリア、ニュージーランド、英、米などからの援助による新しい建物に置換わりつつある。ここには教育、社会・経済開発、自然資源の3学部と応用開発、教育、海洋資源、自然資源、太平洋、社会・経営の6研究施設があり、別に西サモアに農学部がある。

一方UPNGはオーストラリア統治時代の1966年にポートモレスビーに設立されたが、1975年パプアニューギニアの独立と共に、この国の最高学府となり今日に及んでいる。法、文、教育、理、農、医の6学部から成り、学生数2000人弱。建物はなかなか堂々としていた。

スパの室内は耐えにくい程の暑さを感じなかったが、ポートモレスビーは室内でも汗のにじみ出るのを覚えた。両大学とも冷房は極く一部に限られていた。

さて両大学を訪れて話合いの結果つかんだことの1、2を述べたい。

1) 両大学とも日本の大学のさしのべる研究教育の協力関係を待っている。日本からの年間訪問者はフィジー1万人、パプアニューギニア3千人に達し、街に走る車の大部分は日本製の

車と見受けられ、色々な分野での日本政府の協力・交流が進められているのに、大学の教育・研究面での交流には何ら見るべきものがないのが現状である。研究協力には同時にファンドの供与や交換教授席の設定を望む声が強く出されたが、一部の学生の留学意欲も強いものがあった。留学生を受入れるだけでなく、日本の大学院レベルの学生が長期に亘ってフィールドスターのため滞在する希望も訴えられた。

2) 両大学で差し当り研究協力を希望している分野は水産学、農学の分野と見受けた。これらの国々の学術・技術は、地理的位置や歴史からオーストラリア、ニュージーランド、米、英、仏に負っているといつてよいが、そういう中で、とりわけ水産学分野は上記の国々では物足りないのが実状のようであった。南太平洋上の国々は海に囲まれているので、水産業の振興を経済発展の柱のひとつとしている。かつお、まぐろの好漁場であり、環礁内は養殖の格好の場所である。日本の指導・協力を望む所以である。

3) 両大学とも図書館の整備、学生の図書館利用には刮目すべきものがあった。ライブラリアンの地位は確立され、私達との話合いの場にも列席していた。またUSPではSouth Pacific Libraryをもち、鹿大図書館との文献交流も熱心に求めていた。日本においても南方に関するあらゆる文献・資料をどこかの図書館に収集する必要があることは、早くから言われている。鹿大は南科研資料センターで前から文献の収集に努めており、最近農(水産)学関係の拠点図書館に選ばれ、特に南方地域の学術雑誌の収集が進められているので、さらに内容を広げて、あらゆる文献、図書、資料を揃えるよう努力することを、センターを設立した鹿大の目標にかかげるべきだと感じた。

最後に、この度の訪問は国際交流基金の委嘱によって行われたことを記して同基金に謝意を表したい。また行を共にし、援助していただいた中尾佐助センター長にも謝意を表したい。

(56年5月18日研究会)

南海研だより No.5 昭和56年10月16日発行

鹿児島大学南方海域研究センター

〒890 鹿児島市郡元一丁目21-24 電話 0992(54)7141 (内線)2053